7/26/2011

ボランティア活動の基本「チームワーク」

北村社会福祉士事務所
代表　北村　弘之

今回の東日本大震災では、神奈川災害ボランティアネットワーク(KSVN)という組織が個人の思いをボランテイア活動に結びつける活動を行っており、私は 5 月の宮城県亘理町に続き、7 月 5～6 日は宮城県東松島市に夜行日帰りで、また 18～23 日にかけて岩手県山田町にバス中 2 泊、現地体育館 3 泊の活動に参加してきました。 7 月から KSVN のボラバス運営スタッフとして添乗し、宮城では 35 名、岩手では 26 名の参加者とともに活動してきました。　http://ksvn.jp/category/news

これまでに、5 月初めから、のべ 1100 名の人がボラバスでの現地活動に参加し、その他神奈川県内の避難所支援やボラバス支援に多くの方が毎日活動されています。

【山田町は・・・・】

山田町は、岩手県の三陸海岸にあり陸路で入るには東北道を花巻で下り、遠野市から東に入り、釜石市、大槌町を経て現地に入らなければならないというハンディがあり、救助やボランティア活動では他の地域より遅れたところのひとつです。全世帯の 55%の家屋が全壊し、田の浜、大沢地区では 70%近い家屋が全壊したとのことです。 また船越地区は山田湾と船越湾の両方からの津波に遭い、現在も低いところは海水に浸かっていました。

【今回のボランティアバス】

5 月初めにスタートした、KSVN 主催のボランテイアバスは神奈川県バス協会の支援があり、7～8 月末迄に計 100 便(のべ 3000 人)の計画になりました。このようにして企業応援としてバスを出していただくことは本当にありがたいもので、参加者の参加費は 1 回あたり 4,000 円に下がりました。 またそのお陰で宮城と岩手に週 5 便出すことができています。

当然、ボラバス運営スタッフは足りませんので研修会を実施し、すでに約 70 名の体制ができました。

私としても、今回泊り込みで運営スタッフとして参加するのは初めてでしたが、もう 1 名のスタッフと事前の打ち合わせをしながら備えました。

バスは 18 日(月)19 時前、一行 26 名を乗せたバスは横浜天理ビル前を出発し、東北道の車内では自己紹介、SA での夕食後に仮眠に入りました。 翌朝 4 時過ぎには釜石市を通過、このあたりから被害の甚大さがバスの中から見えてきました。やはり映像とは違う光景に初めての参加者は眠気が飛ぶようなものでした。実際にはわかりませんが、津波は 10m はあったのではないかと思われるほど鉄骨だけが無残に残っているのが印象的でした。 その後、やはり被害の甚大な大槌町のローソン(ここは 24h 営業で現地の人の日常品の買い物場)で買い物。 到着後まもなく、品物が入り、翌日の朝食等を買い込みました。 着替えや朝食を済ませ 7 時には現地山田町ボラセンに入り、前便の責任者と引き継ぎに入り、慌しく当日の活動作業の準備に入りました。

この 4 日間では、当初予定通りの「個人宅のガレキ撤去」の他、新たに「写真洗浄」「避難所の風呂洗い」「支援物資の倉庫搬入」「仮設住宅への物資搬入」「保育園での補助」と多様なニーズが出てきました。

実際には、一日あたり 5 時間の作業時間です(大体 9:00～15:30)。 責任者として初めての人にどのように作業を割り振るか、またサブリーダーを誰にするかは、往きのバスでの自己紹介と休憩時の声かけでおよそ把握し、そのあとは毎夜のミーティング等で決めました。

【合宿生活の良さとボランティア参加者】

私にとって、今回は 3 回目の活動でしたが、現地での宿泊生活は初めてでした。 まして体育館での雑魚寝状態。畳の上に寝袋で睡眠をとるので畳みの硬さと体育館のキシミの音、そしてイビキの音に多少敏感になった生活を送り、まるで山小屋に滞在しているような感じでしたが、規則正しい生活を過ごしました。

消灯は 22 時で起床は 6 時。もちろんテレビなし、そして禁酒です。あるのは参加者との話しと新聞です。さすが現代流にインターネットで情報を収集する若者が多くいました。

多分多くの避難所でも同様な生活を過ごされているのではないかと思われました。山田町には仮設住宅はできてきたものの、避難所は 20 箇所近くあります。

今回の合宿生活を通じて、参加者の姿が見えてきました。
大きく分けて、参加者は ①定年後の人 ②企業等を退職して次の仕事を探している人 ③ボランテイア専門家を目指している人(JICA 等) ④企業に勤め、企業の夏休みまたは節電対策休みの人 ⑤学生等となっており、どの人も「被災地のために」という思いで参加している人ばかりなのです。 当然、自己完結(自己責任)のもとで参加ですので、愚痴を発することもなく、お互いに協調した行動が見られます。責任者の私も生活環境の徹底や外部との連絡調整や連携を中心におこない、参加者の自主性に任すことにしました。

特に、被災地支援に思いがあり、この数ヶ月で 10 回ほどボランティア活動している人は自分の役割がわかっており、必然的に小さなアドバイスを出しながらチームがまとまっていきました。そのような人は 5 名ほどいましたが、他のボランテイア団体にも登録して現地活動されているようで、神奈川県では出足が遅かったので、3 月から個人で足を運んでいる人もいました。

このような人や、また初参加で「場を和ます人」のおかげで、現地到着の夜にはすでに数ヶ月前から一緒に生活しているような感じでしました。中年のハエタタキ名人や写真洗浄のプロ(写真会社 OB)、看護師、養護施設職員、ツィッターに情報提供する人と現場で力を発揮する以前に、チーム力で一体感となった感じがありました。まるでサッカーのなでしこ Japan のように日々連帯感というかチームワークが増していきました。人間の生活の営みはやはり凄いと思った次第です。

info@kitawel.com
HK Welfare

【個人での被災地支援者】

今回の我々が泊まった山田町ボラセンの近くに、オートキャンプ場があり、被災地支援のために5人ほどが全国から駆けつけて支援しているのに驚きました。 その場所は我々のシャワーを貸していただいている関係で知ったものです。 初日に訪れたとき、「いや 神奈川県から来たのか。そのビブス(工事者がつけているようなベスト状のもの)がほしいなぁ」 と言われました。 その人は横浜から4月に来て、キャンプ場に寝泊りしながら被災地の支援に毎日出かけているとのことでした。 ビブスがほしい理由は、他の人は各県のビブスをつけているのに、自分は何もない。神奈川県から来ていることをもっとアピールしたいとのことでした。 ごもっともでした。 この人は秋まで滞在するとのことでした。 またこの人の紹介で、北海道から来ている人や広島から来て、お好み焼きを被災地の現場に行き食べていただいている人などがおられました。

このようにして見ず知らずの人達が一箇所に集まり、被災地のガレキ回収(トラックに人力でガレキを積み上げる)をしたり、時には行政にお願いしたりしているようです。 また、我々が泊まった体育館にも千葉からこられた人が個人で長期にわたりがんばっておられました。この人たちは70歳前後の方で自分の職能を活かして支援している人ばかりでした。 もちろん、食事は自分で作ったものを仲間同士で分け合うなどまるで昔ながらの長屋風景のようでした。 私は酒を勧められましたが、KSVN は横浜を出てから戻るまで禁酒なので残念ながらお断りしました。

本当に自分の居場所も被災地同様、「お互い様」の気持ちをもって活動されているのには頭が下がる思いがしました。 我々はサラリーマン的ボランテイアとしたら、彼らは技能を持ったプロボランテイアという感じでした。 以上

info@kitawel.com
HK Welfare